

《資料》

## 「正しい手洗い」に着目した保健授業（特別活動）の実践

井出 孝介<sup>1)</sup> 今村 ゆずか<sup>2)</sup> 物部 博文<sup>3)</sup>

キーワード：手洗い、手洗いチェッカー、COVID-19

### 1. はじめに

2019 年末に中国で原因不明の肺炎が見つかり、2020 年 2 月に世界保健機関（WHO）は、その肺炎（新型コロナウイルス感染症）を COVID-19（coronavirus disease 2019）と命名した。その後、COVID-19 は急速に日本でも蔓延し同年 3 月から全国一斉に学校の休校措置が取られ、同年 4 月には日本政府から緊急事態宣言が発出された。約 3 ヶ月間の休校を経て学校が再開したものの、感染対策を講じての教育活動が必須となった。新型コロナウイルス感染症対策本部は、感染対策として、『『三つの密』を徹底的に避ける、『人と人との距離の確保』、『マスクの着用』、『手洗いなどの手指衛生』等の基本的な感染対策を行う』と述べている<sup>1)</sup>。この感染対策は、先だって文部科学省が教育現場に示した「新型コロナウイルス感染症の予防」と類似しており、その中では日常の保健の指導として 7 事例を挙げ、子どもの発達段階を踏まえた指導を求めている<sup>2)</sup>。両者の感染対策の中で示されている「手洗い」は、誰もが簡便に取り組める感染対策であるとともに、感染対策上、重要な行動でもある。そのため、COVID-19 が流行してから現在に至るまで、学校現場では児童生徒に手洗いの指導が継続的に行われている。

学校再開当初は、本校の児童も COVID-19 に対して大きな恐怖を抱きながら生活している姿が見受けられ、特に手洗いに力を入れていたように感じられた。しかし、令和 2 年 6 月に学校が再開されてから約 6 ヶ月が経過した 12 月までの間に、児童の中でこの手洗いがマンネリ化している現状に筆者は疑問を感じていた。教諭から声をかけなければ手洗いをしない児童が増えてきており、手洗いは行っているものの石鹸を使用しないで流水のみで済ませている児童や、ハンカチを使用しないで衣服で手を拭く児童も多く観察されるようになった。長期間の

COVID-19 対策が児童の中で「慣れ」となってしまう、正しい手洗いの重要性を意識していないとともに、正しい手洗いの習慣が身につけていないと考えた。ライオン株式会社が小学校 3 年生までの子どもをもつ保護者を対象に行った手洗いに関するアンケートでは、約 4 割の保護者が「子どもは 1 人でしっかり手を洗えていないと思う」と回答している<sup>3)</sup>。教師の目線からだけでなく、保護者の目線からも子どもの正しい手洗いの不十分さが懸念されている現状が伺い知れる。それでは、正しい手洗いとはどのような手洗いなのだろうか。手洗いは流水だけではなく石鹸やハンドソープを用いることが好ましい。森ら(2006)は、ノロウイルスへの対策として手洗いの有効性を挙げており、水によるすすぎのみでも 100 分の 1 程度にウイルスの量が減少することに加え、手洗い時に洗浄作用やウイルス不活性化成分が配合されたハンドソープを利用することで一層の効果が期待できる。さらに、もみ洗いの時間を長く、あるいはもみ洗いの回数を増やすことによりウイルス除去効果が高まる結果が得られたと述べている<sup>4)</sup>。花王株式会社（以下、花王）の H P では、手洗いをすべきタイミングとしては、外から帰宅後、調理・食事前、トイレ後、介護・介助前後などが挙げられ、これらの際の手洗いは石鹸やハンドソープを使用して丁寧に行う必要がある。また、手洗いで洗い残しが生じやすい部位としては、手の甲、指先や爪の間、指の間、親指、手首という報告をしている<sup>5)</sup>。

手洗いに関する教育方法では、ATP 拭き取りによる清浄度検査や簡易拭き取りによる細菌数の検査、手形スタンプ培地、手洗い教育用キット：グロー・ジャームによる演習、食パン、でんぶん・ヨウ素液などがある<sup>6-8)</sup>。いずれも視覚的に細菌や汚れ等を捉えることができ、それによって手洗いの意義や必要性を意識づけている。これらの方法の中から、金銭面・準備面で実施可能な方法として簡易手洗いチェック装置(サラヤ株式会社（以下、サラヤ）手洗いチ

1) 川崎市立土橋小学校

2) 横浜市立都田小学校

3) 横浜国立大学

ェッカー)を選択し、本実践研究に用いることとした。論文サイト CiNii で小学生を対象として手洗いチェッカーを用いた研究は見出せなかったものの、保育所の幼児、看護師(看護学生を含む)などへの研究は散見された。山本ら(2015)は、蛍光塗料とブラックライトを用いた手袋の外し方の研修は、自分で気づかない汚染を視覚化することにより、手袋を外した後の手指衛生の重要性という認識改善につながったと述べている<sup>9)</sup>。そうした研究からも、児童が視覚的に分かりやすく認識できる手洗いチェッカーは、教材としても効果的だと考えられる。

これまで手洗いチェッカーを教材として用いた保健教育の実践例は数多く存在するものの、実践者である教員が研究的な視点から授業を計画・実践し、その実践を分析・評価し、研究論文として公表されたものは比較的少ないと言える。そこで、小学校2年生の児童を対象に学級活動の一環として、児童が「正しい手洗い」の方法とその効果を実感できるような授業について計画・実践し、評価することで保健教育の効果を明らかにすることを目的とした。なお、本実践研究については、学校長の了解も得ている。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

本校 第2学年 5クラス中の1クラス34名

### 2. 調査・実践日時

2020年11月～2021年1月

### 3. 実践計画

表1 実践計画

①	事前アンケート 授業実施前の手洗いの実態を明らかにするために、次のようなアンケート内容で調査を行った。 (1)今日、登校後に手洗いをしたか。 (2)今日、トイレの後に手洗いをしたか。 (3)今日、給食の前に手洗いをしたか。 (4)今日、手洗いをした時に石鹸を使ったか。 (5)今日、手洗いの後にハンナカチを使ったか。 (6)毎日、「正しい手洗いをしている」と自信をもって言えるか。
②	授業実践 「みんなでウイルスをやっつけろ！正しい手あらいださくせん！」
③	短時間学習(昼休み後の15分学習)の時間に全児童による手洗い実験
④	事後(1ヶ月後)アンケート(①と同様)

## 4. 教科の位置付け

特別活動 学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の1時間(45分間)

## 5. 倫理的配慮

対象者の保護者に、紙面にて研究目的ならびに手洗いチェッカー使用の旨を伝え、承諾書の回答・提出をもってその同意とした。

## 6. 授業実践の指導課程(2020年12月)

授業実践における指導課程を付表に示した。本時のねらいは、「COVID-19 や季節性のインフルエンザに罹患しないために、『正しい手洗い』をすることの大切さに気づき、自分の手洗いのめあてを決めて実践できるようにする」であった。

## III. 結果及び考察

### 1. 授業前後のアンケート調査結果の比較

授業前は、筆者が感じていた実態とは異なり、ほとんどの場面で手洗いをしていると回答する児童(図1)や、石鹸を毎回使っているという児童(図2)が多いことが分かった。しかし、半数程度の児童は「正しい手洗いをしている」と自信をもって言えないことが明らかになった(図3)。

授業を終えた1ヶ月後(2021年1月)の、事後アンケート(質問内容は事前内容と同様)では、すべての質問で「はい」と回答する児童が増えた。特に、「正しい手洗いを意識している」と感じている児童が多く、実践の効果があつたと推察された(図3)。なお、授業前では1名の欠席児童がいた。

### 2. 授業実践中の児童の反応(発言やワークシートなどから)

#### 1)アンケート結果から、「正しい手洗い」をできていないという意識の確認

事前に行ったアンケート結果から、気づいた点を自由に発言させた。児童からは、「思った以上に手を洗っている人が多い」や「全員洗っていないとウイルスが教室に広がる」など、様々な意見が出てきた。その中でも、特に「手を洗っている人が多いけど、正しい手洗いができているかは自信がないんだね」という発言が印象深い。筆者が一番気づいてほしかった点が、まさにその発言である。児童の中で、手洗いは行っているものの、「正しい手洗い」の方法が分からないという思いを確認できた導入であった。

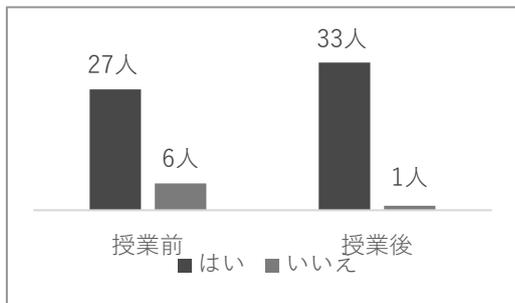


図1 登校後の手洗いの有無

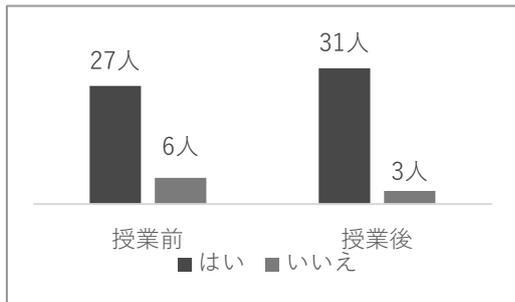


図2 手洗い時の石鹸の有

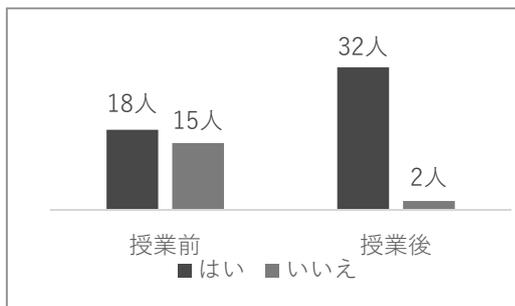


図3 正しい手洗いへの意識

2)グループごとの手洗い実験

本時では、サラヤの手洗いチェッカーを使用して実験を行った。なお、被験者の児童に関しては、事前に保護者から同意を得て実施した。実験の手順は以下の通りであった。また、実験前に「いつも通り洗う」ことを意識づけさせた。本時では時間の都合上、5人グループから代表の1名のみ実施した。

実験を行うと、ほとんどの児童の手の甲や手首、親指などが白くなり、洗い残しを確認することができた。さらに、被験者以外の児童は、ワークシートに洗い残しの箇所を記入し、記録に残した。児童が記入したワークシートの中から、一部を図4、図5に示した。どちらの児童も洗い残しを確認し、手のひら・甲に注目していた。しかしながら、全てを塗ってしまっている児童も数名確認されたことから、2年生の発達段階で手を部分ごとに見ながら塗る難しさも課題として挙げられた。

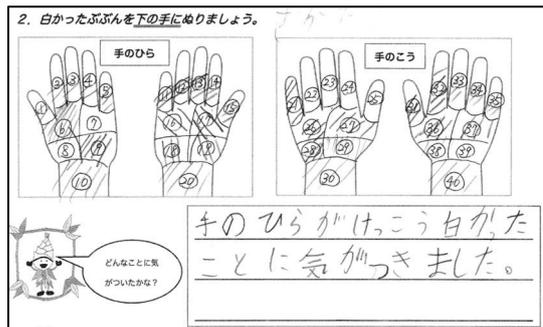


図4 A児のワークシートの抜粋

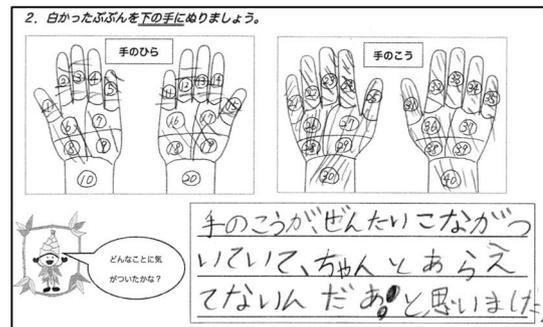


図5 B児のワークシートの抜粋

3)洗い残しを全体で共有

被験者に「汚い」「ちゃんと洗っていない」というイメージが湧かないように全体で指導するなど、人権的配慮を行った上で、被験者1名の手をリアルタイムでテレビに映し、洗い残しの箇所を確認した。グループだと見づらかった実験も、テレビで拡大することで見やすくなったため、様々な反応が出てきた。全体で共有した後に、教師から「なんで手が白いのかな？」と発問すると、児童から「ちゃんと洗えてないから」という発言が出てきた。そこで、「ちゃんとってどういうこと？」という発問で更に掘り下げると、児童から「正しい手洗いができていない、特に手首と親指」という発言が生まれ、改めて本時のめあてである「正しい手洗い」に立ち返ることができた。

4)正しい手の洗い方の曲

様々な手洗いの歌がある中で、本実践では、30秒で効果的に汚れを落とすことができる6つのポーズをするように設計されており、手のすみずみまで洗うことができる<sup>10)</sup>「あわあわ手あらいのうた」(図6)を活用して正しい手洗いの仕方を確認した。本来ならば正しい手洗いの歌を聞いた後、もう一度手洗いチェッカーの専用ローションをつけて実験し、どのくらい洗い残しがなくなるのか確認すべきではあ

るが、本時では時間の都合上、その場で手洗いの仕方を確認・練習するのみとした。なお、正しい手洗いの歌を用いた手洗い実験は、1週間後の短時間学習でクラスの全児童が実験を行った。



図6 あわあわ手洗いのうた (花王HPより抜粋)

5) 授業のまとめ

最後に、ワークシートに今後の児童それぞれの手洗いのめあてを記入した。どの児童も「洗い残しがあつた箇所を入念に洗いたい」や「手洗いの歌を歌いながら洗いたい」など、手洗い実験から得た結果を踏まえて自身のめあてを立てていた。実際に児童が記入したワークシートを学習の足跡として掲示し、それぞれのめあてを共有できるようにした。児童が記入したワークシートの中から、一部を図7~10に示した。

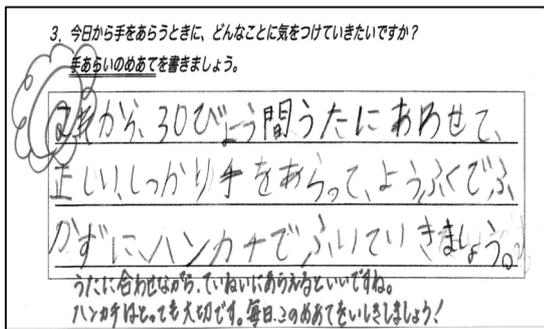


図7 C児のワークシートの抜粋

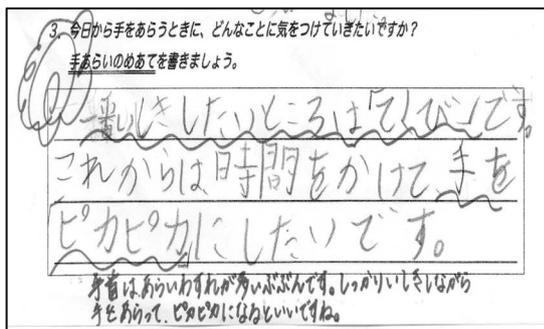


図8 D児のワークシートの抜粋

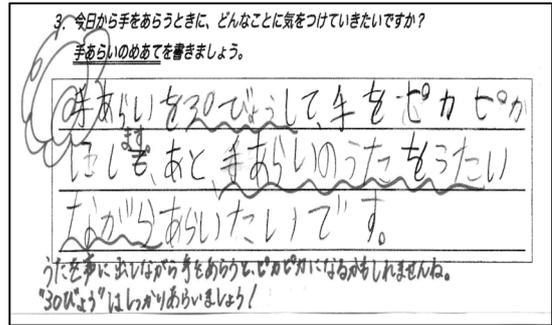


図9 E児のワークシートの抜粋

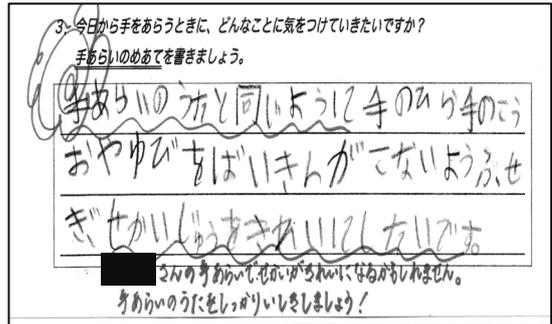


図10 F児のワークシートの抜粋

IV. まとめ

1. 児童の手洗いへの意識

授業を実践してから、児童が意欲的に手洗いを行うとともに、「正しい手洗い」を意識している姿が伺い知れた。また、水飲み場に花王「あわあわ手洗いのうた」のやり方を掲示したり (図 11)、給食準備中に放送で歌を流したりしたことで、歌を歌いながら多くの児童が「正しい手洗い」をしていた。更に、児童同士で「〇〇さん、カメさんをやってない!」と注意し合う姿や、「先生、毎朝ハンカチをチェックしましょうよ!」といった発言が生まれた。また、養護教諭と軍手を手に見立てた掲示物も作成し、保健室の前に掲示した (図 12)。



図11 水飲み場前の掲示物



図 12 保健室前の手洗いの掲示物

## 2. 本実践研究の課題

まず、実践の事前と事後で手洗いに関するアンケートを児童に行った。数値としては事後の方が「はい」と回答する児童が多かったが、果たして児童がこのアンケートをどのくらい理解していたのかが不明である。すなわち、アンケート結果が良い方向に変容したからといって、実践の効果があったかは判断しづらいと考えられる。そのため、小学校2年生であるならば、事前と事後で児童の手洗いの様子を観察したり、ビデオで録画したりしておくなどの方法が効果的だったかもしれない。更に、実践を行った12月は気温の低い真冬である。学校の水道水は冷たく、大人でも手を洗うのが辛い水温のため、児童はそうした冷たい水道水への抵抗もあったのではないかと考えられる。季節が変われば、手洗いの実態も大きく変わったと推察できる。

実践では上記でも述べた通り、実験の中で洗い残しは確認できたものの、時間の都合上、「正しい手洗い」を行った際の洗い残しを確認することができなかった。可能であれば、連続で2時間分の授業数を確保し、実験の結果を比較すれば、更に児童の学びが深まったと考えられる。また、小学校2年生ということもあり、実験の中で「いつも通り手を洗って」と声をかけても、明らかに普段より念入りに手洗いをしている児童が若干名見受けられた。事前に実験の趣旨を詳しく説明するべきではあったものの、小学生の実態からして止むを得ない状況とも言えるだろう。

最後に、児童が実は正しく手を洗えていないという実感を持たせたい教師の思いが、「正しい手洗い」という言葉の多用に繋がった。しかし、本来であれば「正しい手洗い」という言葉を使わなくても、児童が自分自身の普段の手洗いの課題に当事者性をもって気づく学習をデザインすべきであったと反省し

ている。また、アンケート結果からは、手洗いを行っていると回答した児童が多く確認できたものの、教師による観察では、手洗いを「習慣化」できていなかったり、教師が声かけを行った時にしか取り組まなかったりする児童も多くいるという現状があった。そのため、本時で指導した「正しい手洗い」以前に、なぜ手洗いを習慣的に行わないといけないうかを指導する必要があったと考える。以上のような状況を踏まえると、今後は、手洗いの仕方を細かく指導しすぎるのではなく、まずは小学校2年生の児童が毎日手を洗うように促す授業内容にするなど、児童の実態に合わせた柔軟な実践研究が必要になってくるだろう。

## 3. 今後の展望

本実践研究は、「正しい手洗い」に着目した授業であった。低学年の児童に対して、正しい手洗いの方法のみを指導しても、現在の手洗いがどのくらい正しいのかを理解していなければイメージがしづらいつと考える。そこで本実践では、山本ら<sup>9)</sup>の研究を参考に手洗いチェッカーを用いて、児童が今の手洗いでどのくらい洗い残しがあるのかを視覚的に理解できるよう手立てを行った。そのために、事前に養護教諭とも緊密に授業構成を協議し、ブラックボックスの作成や、学校薬剤師からブラックライトを借りるなどの手配も行った。実際に手洗いチェッカーを用いて洗い残しを確認することはできたが、専用ローションを全て洗い流すことは容易ではなく、児童から「『あわあわ手あらいのうた』で洗ったけど、全部落ちなかった」という意見も出てきた。授業後に、筆者と他の教員の手専用ローションをつけて、「あわあわ手あらいのうた」に合わせて手洗いをしたところ、僅かながら白い跡が残った。小学校2年生にとっては、専用ローションは薬力が強かったことに加えて、「あわあわ手あらいのうた」を完璧に行うのは難しいと推察される。しかしながら、視覚的に洗い残しを認識できるという視点では、手洗いチェッカーは効果的な教材であり、「あわあわ手あらいのうた」も子どもに馴染みやすい教材と言えるだろう。

未だ収束の兆候が見られない COVID-19 を防ぐためにも、児童に毎日の手洗いの指導を継続していく必要性を改めて感じた。今後は、対象を他の学年にも広げ、手洗いの指導の可能性とその方策について、探究していきたい。

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 文献

- 1) 首相官邸, 新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針 (令和3年8月5日変更),  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel\\_coronavirus/th\\_siryoku/kihon\\_r\\_030805.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/novel_coronavirus/th_siryoku/kihon_r_030805.pdf),  
閲覧 2021年9月12日.
- 2) 文部科学省, 新型コロナウイルス感染症の予防～子供たちが正しく理解し、実践できることを目指して～,  
[https://www.mext.go.jp/content/2020501-mext\\_kenshoku-000006975\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/2020501-mext_kenshoku-000006975_5.pdf),  
閲覧 2021年9月12日.
- 3) ライオン株式会社, 今こそ身に付けさせたい! 子どもの手洗いの習慣化 感染症予防に向けて,  
[https://lioncorp.s3.amazonaws.com/uploads/tmg\\_block\\_page\\_image/file/7449/20210128.pdf](https://lioncorp.s3.amazonaws.com/uploads/tmg_block_page_image/file/7449/20210128.pdf),  
閲覧 2022年6月14日.
- 4) 森功次ら: Norovirus の代替指標として Feline Calicivirus を用いた手洗いによるウイルス除去効果の検討,  
感染症学雑誌, 80(5): 496-500, 2006.
- 5) 花王株式会社, 細菌やウイルスも洗い流そう!,  
<https://www.kao.co.jp/lifei/support/77/>,  
閲覧 2021年10月6日.
- 6) サラヤ株式会社, プロフェッショナル手洗い 食品衛生のための業務用「手洗い情報サイト」,  
<https://pro.saraya.com/pro-tearai/>,  
閲覧 2021年10月6日.
- 7) 株式会社スギヤマゲン, 院内感染対策 手洗い教育用キット,  
<https://www.sugiyamagen.co.jp/publics/index/92/>,  
閲覧 2021年10月6日.
- 8) 日本ユニセフ協会, 手洗いを学ぼう 実験! 手の汚れを確かめてみよう,  
[https://handwashing.jp/study\\_03.html](https://handwashing.jp/study_03.html),  
閲覧 2021年10月6日.
- 9) 山本容子ら: 看護師を対象とした手指の汚染状況を可視化する—手指衛生教育の実践に関する検討—, 医学教育, 46(6): 491-495, 2015年.
- 10) 花王株式会社, 効果的な手洗い,  
<https://www.kao.com/jp/hygiene-science/general/handwashing-method/>,  
閲覧 2022年3月31日

(2022年2月4日投稿受付, 2022年7月16日受理)

付表 指導課程

	児童の活動	指導上の留意点 (○) めざす児童の姿 (☆)	資料・実験
導入	<p>【つかむ】</p> <p>1.手洗いアンケートの結果から気づいたことを発表する。</p>	<p>○アンケート結果を理解できるように、表やグラフの読み取り方を説明する。</p> <p>○アンケート結果から気づいたことを板書にまとめる。</p>	・アンケート結果
<b>みんなでウイルスをやっつけろ！ 正しい手あらい大きくせん！</b>			
展開	<p>【さぐる】</p> <p>2.グループごとに手洗い実験を行い、汚れが残っている箇所を確認し、ワークシートにまとめる。</p> <p>&lt;実験方法&gt;</p> <p>①手全体に専用ローションをつける。</p> <p>②普段のように手洗いを行い、ペーパータオルで水気をとる。</p> <p>③ブラックボックスに手を入れて、ブラックライトを当てる。</p> <p>④白く反応する箇所(洗い残し)を確認する。</p> <p>【見つける】</p> <p>3.代表の児童の手を見て、洗い残しのあった箇所を見つける。</p> <p>4.正しい手の洗い方の曲 花王（あわあわ手あらいのうた）を聞き、練習してみる（その場で）。</p>	<p>○グループは事前に決め、手洗い実験を行う代表の1名は予め決めておく（※<u>代表の1名は事前に保護者から同意を得た児童</u>）。</p> <p>○ブラックボックス、ブラックライト、ワークシートを配付する。</p> <p>○専用ローションは教師がプッシュする。</p> <p>○代表の1名の手を大型テレビに映す。</p> <p>○黒板に大きな手の掲示物を掲示し、児童が発言した洗い残しの箇所を塗っていく。</p>	・専用ローション、ブラックボックス、ブラックライトを用いた手洗い実験
終末	<p>【決める】</p> <p>5.今後の自分の正しい手洗いについてめあてを考え、ワークシートに記入する。</p>	<p>○なにを、どのように行うのか、具体的なめあてを書くように助言する。</p> <p>☆自分にできる正しい手洗いのめあてを立てている。【思考・判断・表現】</p>	